

第200回 日文研フォーラム



# 楽しみの茶と嗜みの茶

## 中国から見た茶の湯文化

Tea for Enjoyment and Tea as Accomplishment

A Chinese Perspective on *Cha no yu*



陸 留 弟

LU Liu Di

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 片倉もとこ





● テーマ ●

# 楽しみの茶と嗜みの茶

## 中国から見た茶の湯文化

Tea for Enjoyment and Tea as Accomplishment  
A Chinese Perspective on *Cha no yu*

● 発表者 ●

陸 留 弟  
LU Liu Di

華東師範大学外国語学院 日本語学部 教授

Professor, Foreign Language School, East China Normal University

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2007年3月13日 (火)

## 発表者紹介

陸 留 弟

LU Liu Di

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

## 略 歴

1977年2月 華東師範大学外国語学部卒業

1985年3月 大阪外国語大学修士課程修了（同大学文学修士）

1986年4月—現在 華東師範大学外国語学院日本語学部教授

2005年11月—現在 上海市第六回茶葉協会理事

## 著書・論文等

- 1 「日本茶道史話—叙至千利休」（単著（訳書） 世界図書出版社 1999年4月
- 2 「伝統文化はどのように言葉を越えられるのか—中日茶文化の違いについて」  
単著（論文）「農業考古」2001年4月 江西社会科学院
- 3 「中日茶文化の比較—茶芸と茶道、楽感の茶と苦寂の茶などを中心に」（単著、  
論文）日本経済評論社 2001年12月 鹿児島国際大との共同研究による成果  
として「日中の経済社会文化研究論文集」
- 4 「中国茶」（CD-R開発）2001年 華東師範大学出版社
- 5 「中国茶芸日本茶道相違論考—その一」（小論文）上海市茶葉学会季刊誌「上  
海茶業」2002年第77期
- 6 「中国茶芸日本茶道相違論考—その二」（小論文）上海市茶葉学会季刊誌「上  
海茶業」2003年第80期
- 7 「中国茶芸日本茶道相違論考—その三」（小論文）上海市茶葉学会季刊誌「上  
海茶業」2004年第86期
- 8 「中日茶文化の異同一茶芸と茶道を中心に」本論文は外国語学院の主催によ  
る〈アジア・太平洋における市民社会と文化の多様性〉というシンポジウム  
において中国・日本・オーストラリアの学者・専門家らと一緒に発表したも  
のである。英語で論文集に載せている。2004年6月 学林出版社
- 9 「異文化コミュニケーションへのアプローチ—中日の言葉と文化」（論文）  
2004年9月 〈日本学研究〉上海外語教育出版社
- 10 「同時通訳シリーズ教科書—英・日・独・仏・露五種言語高級通訳技能とト  
レーニング法」2006年 華東師範大学出版社

## はじめに

楽しみながら飲むお茶から生まれたのは「茶芸」であり、嗜みとして点てるお茶から生まれたのは「茶道」であります。緑茶、黒茶、青茶（ウーロン茶）、紅茶、白茶、黄茶・花茶（ジャスミン茶）が使われる茶芸に対して、茶道は抹茶、煎茶を媒介にして、「一期一会」と「一座建立」が好まれます。

茶というのは、人間の顔に喩えるなら、大きく二つの違う表情に分けられましょう。またその違う表情によって、それぞれのメッセージをわれわれに伝えてくれます。中国人の「快樂」を味わうような楽しみのお茶と日本人の「精神」を修養し、礼儀作法を究めるような嗜みのお茶には、それぞれ「楽」と「苦」、「快」と「寂」の世界が展開されています。

「快樂」主義的な茶飲みからは、「客来敬茶」（客に茶をもてなす）、「以茶養身」（茶で身体を癒す）という茶芸が派生します。「精神」修練的な茶飲みからは「和敬清寂<sup>わけいせいじやく</sup>」、「修身得道」（身を修め、道を得る）という茶道が受け継がれています。

楽しみとしての「茶芸」にしても、嗜みとしての茶道にしても、両方を融合すれば、

茶の「芸道」になります。即ち、芸には道があり、道には芸があります。この茶の「芸道」に秘められているのは、言うまでもなく、「人と人の輪」の広がり、「世の中の和」の安定に帰するのではないでしょうか。

たかがお茶なのに、なぜこの茶の葉（図1）に対し、我々人類がこれだけの熱情を注ぎ込んで、宗教的な心を込めたのか。いろいろな樹木類の葉があるのに、また野菜類のホウレンソウとかキャベツとか大根の葉もあるのに、どうしてこの茶樹の葉にだけ傾倒したのか。言ってみれば魔力のある葉なのではないでしょうか。フランスのある歴史学者は、お茶を「文明植物」とも称したのです。

私がお茶と出会ったのは、今から一五年前のことでした。当時、国立民族学博物館の熊倉功夫教授が、裏千家訪中団とともに来訪され、わが大学の図書館で主に本大学の日本語学科の教員と大学生、そのほか、副学長、関係部署の教職員に「茶道と日本文化」という題で講演をされました。通訳は私が勤めました。とても緊張しました。なぜなら、お茶について

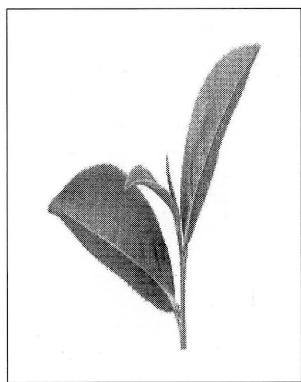


図1

の知識は殆ど無いと言っているくらいなのが一つ、二つ目は、日本語学科の教員と日本語専攻の大学生を前に、通訳をするということでした。誤った通訳をする、メンツがなくなってしまうからです。ここで中国人の精神に浸み込んでいるこの「メンツ観」は、いかに重要であるかがわかることでしょう。熊倉功夫教授の講演が終わった後、裏千家の実演を見学し、一碗一碗の抹茶を皆でそれぞれ味わいました。この日はとにかく何とかクリアしましたが、翌日も、上海のあるホテルで、再度出馬してはどうかという駐上海日本総領事館の文化担当の方からの依頼があり、ほぼ同じような内容かと思つて、その会に臨んでみると、熊倉先生はいきなりお茶と哲学の話をはじめました。なぜ昨日とは打つて變つて、いきなりこんな難しい話をされたのかと思つたら、出席者は上海市政府関係者のほかに、殆どが日本人の方々ばかりではありませんか。このように、二日間も緊張感を味わいました。後で考えてみましたが、やはりこのような緊張感はあつてよいものです。中国人にはこれまであまり緊張感がなかったから、近代化を遅らせたのではないかと思ひます。このような緊張感のおかげだったのか、或いは、茶の湯心に魅了されたのか、そのときから、日本語教育の傍ら、お茶への勉強と考察が始まったわけです。

さて、今日のテーマの中で、動詞の連用形とする「楽しみ」の漢字は、音読では、「楽らく」と言います。つまり「楽茶」と言っても差支えありません。しかし、よく考えてみると、「音楽」の方は、確かに「がく」と発音します。同じ字なのに、なぜ発音が違うのか。この「らく」と「がく」の字義は同じだったのかを考えました。

古代中国における「楽らく」という言葉の意味は「音楽」だそうです。でも「音楽」という言葉は、『論語』『孟子』『荀子』などにはまだ出ていません。出たのは、『呂氏春秋』という文献でした。「楽らく」の字は古代楽器を表す象形文字で、音楽と舞踊の意味があります。この点で、日本の上代の楽という古語にも「歌舞うたまい」や「あそび」という意味があって、つまり漢語としての「楽らく」の字を当てたものです。

ここで、私が考えた「楽しみの茶」というのは、やはり昔の中国人が、「歌舞」や「あそび」をしながらお茶を飲んでいたのではありませんか。つまり、何かを楽しみながらお茶を飲みます。それに対して、何かを慎み、遠慮し、または我慢する気持ちを込めながらお茶を飲む場合もあります。

茶の湯という言葉は何時ごろ成立したのか、今から一二〇〇年前の陸羽の「茶経」第五章「茶の煮立て方」には、「(前略)第二沸のとき、湯一杓を酌みだし、竹きょうで湯の中心をぐるぐるかき回し(後略)」とあり、茶の湯の湯を使っていました。(図2)



図2

日本の場合は、八〇七年に中国の唐に渡った空海が日本に戻った時、その典籍、図絵、法典類の一部を当時の嵯峨天皇に献じました。弘仁五年（八一四年）七月二八日付けの「空海奉献表」（性霊集）巻四には、「窟観余暇、時学印度之文、茶湯坐来、乍閱振旦之書」とあり、学問の間に茶の湯を飲む空海の姿を彷彿とさせるものである。と記されています。

このように、陸羽の「茶経」に出た茶の湯について  
の記録が、およそ四〇〇年近く後に、日本の文献にも「茶の湯」という言葉で現れました。しかし、今日の日本の奥深い茶の湯の世界のほかに、まだ、銭湯の湯もあります。この湯はあくまでもわれわれの体を包んでしまう湯のことです。

国立民族学博物館の名誉教授でいらっしやいます石毛直道先生が、国民一人あたり年間二〇〇杯以上のお茶を飲む国はお茶の国民とし、同じく国民一人あたり年間二〇〇杯以上のコーヒーを飲む国をコーヒーの国民とし、そして、国民一人当たり年間お茶もコーヒーも二〇〇杯以上飲んでいる国をお茶とコーヒーの国民としています。

無論中国は「お茶の国民」です。しかし、お茶の国民は中国だけではありません。日本もインドも恐らくイギリスもお茶の国民と言えましょう。東アジアの一隅に発した茶は、ますます世界に進出して、やがては、お茶の国民になろうとしている国が増えつつあるのではないのでしょうか。現に世界に二〇〇〇以上の民族がある中で、恐らくお茶を飲む民族はもう少なくはないでしょう。

茶はただの木の葉ですが、私たちの日常生活に欠かせないものです。なぜでしょうか。考えさせられる問題意識のもとに、次に、「茶の起源と茶の利用」、「茶の湯に潜む精神主義」と「茶芸の茶道に学ぶべきもの」を中心に述べてみたいと思います。

### 茶の起源と茶の利用

同源異形というのは、中日のお茶を飲む習慣や思想などがそれぞれ違うということです。具体的に言くと、つまり「成仙思想」と「茶禅一味」のことです。

中国の茶芸は道仏儒観の影響を大きく受けています。

例えば、大昔のことですが、伝説上、「神農 百草を嘗め尽くし、一日に七二の毒に遭遇して、茶を得て解毒した」という。(図3)



これは、お茶は、神農にその源を発するという伝説記録です。記載にはまた次のようにあります。「ある日、神農がある種の葉を飲み込んだ後、お腹の中を葉が歩き出した。なんと腸を隅から隅まで歩きまわる。すると、腸のすべてがきれいに洗われたがごとく、

気持ちがとてもよい。その後、神農は

この種の葉を脳裏に焼きつかせて、毎日口に入れては摘み、摘んでは口に入れ、やがて、それに茶という名前を与えてしまったのである」とあります。

無論、神農は、伝説上の存在です。その神農がはじめてお茶を発見し、また自らの体感を通して、私たちに、「これを口に入れてもいいんだよ」というメッセージを伝えてくれたとは、到底考えられません。しかし、そのような伝説上の神の実在性は別にして、この物語自身が、少なくとも我々人間によるお茶の発見、体感を繰り返し、口に入れても別段命に害がなく、健康によいという認識を得た過程を暗示しているのではないかと思われまふ。それにしても、お茶の葉をはじめて咀嚼し、味わった人はやはりたいした



図 3

ものだと思います。お茶に限らず、そもそも人間の自然への認識において、初体験者または第一発明者は、やはり皆に敬われるものです。

お茶が正式に商品化されたのは、いまから、およそ二〇六〇年前のことです。中国の前漢の時（紀元前五九年）、王褒の「僮約」（奴隷売買の契約）という文章に、その記載があります。

この文には、王褒が未亡人の楊恵から奴隷の便了を買い取り、便了の日常にやるべきことがこまごま証文に書き付けてあります。その中に「茶を煮る」とことと「武陽で茶を買う」とことがあります。実は、この記載で、茶の字は、「荼（tu）」を用いています。その文字の意味は「苦菜」（にがな）ですが、しかし、わざわざ武陽まで、新鮮な野菜のようなものを買い求めに行くはずはありません。武陽は、四川の成都市内から七七キロも離れたところにあります。それゆえ、ここで「買う」ものは、ほかでもないお茶と考えられます。これは、中国漢代の四川省の文人墨客の世界で、お客の接待には、お茶の姿があつたことの最初の記録です。言ってみれば、この世の中で、お茶としては、初めて文化的「市民権」が獲得されたわけです。

陸羽の名著『茶経』が誕生したのは、恐らく紀元七六〇年ごろのことです。著書は三卷十章からなっています。その十章は次の通りです。一之源（茶の起こり）二之具（製

茶器具）三之造（製茶法）四之器（茶器）五之煮（茶の煮立て方）六之飲（茶の飲み方）七之事（茶の資料集）八之出（茶の産地）九之略（略式の茶）十之図（二幅書いて掛けておくこと）ということです。お茶の「茶」の字は、陸羽の「茶経」という書物が誕生したのと同時に現われたわけです。いまから一二四〇年前のことです。

古来、飲茶にまつわる詩が無数に作られてきました。『中国茶文化經典』には、唐宋時代の茶詩が六八〇首ほど収められており、中国茶の至福の世界を垣間見ることができますが、中では、茶芸を詠った詩も少なくありません。紙面の都合上、ここでは茶芸を詠った名詩を一つ紹介してみたいと思います。

盧仝という唐の中期頃の詩人（？～八三五）が居て、彼は、『走筆謝孟諫議寄新茶』という作品の中で、「七碗茶」を披露しました。

最初の一碗で、自分は唇と喉を潤し、第二碗で淋しさを破ります。

三碗目で文才なき自分の枯れた腸を探るのですが、そこには見慣れない字句が五千巻分並べられているばかり。

四碗目で少し汗を流し、日々のわずらいが毛穴を通って去っていきます。

五碗目で自分の全身は清められ、六碗目で茶が私を不老の世界へと誘います。

でも、もうこれ以上飲めません。今はただ袖に涼しい風を感じるだけです。

蓬莱山はどこでしょうか。この優しい風に乗り、漂いながらそちらに帰りたいなあ。

ここではお茶が仙靈に通じると表現しています。つまり、中国のお茶は、道教からの仙人になる思想が反映されています。

東アジアの一隅に発するお茶の歩みを、日本へのルートについて見てみますと、次のようです。

日本のお茶は、平安時代の初期、弘仁年間（八一〇～八二四年）になって現れました。最澄、空海、永忠などによって、断続的に紹介されたのです。その後も、中国に渡った僧侶たちは、それぞれ寺院の中でのお茶の姿に接しました。ですから、中国の寺院茶の姿を見よう見真似で学び取って持ち帰ったのではないのでしょうか。今でも、お寺の中に茶室が設けられるところが多いようです。そして、お寺の中に、「供茶」という習慣も残っています。ここでは、日本の茶の湯は宗教と深く関わっている状況が見られます。茶禅一味の考え方は、現在も比較的強いのです。このような日本の茶の湯の姿に対して、中国のお茶は、最初に薬として、庶民によって発見され、そして庶民の間に直接浸透し

ていき、やがては、茶の効用などが認識されることによって、寺院茶とか、宮廷茶とか、最後に唐・宋・明時代の文人茶がそれぞれ発達してきました。中国茶文化史から見れば、文人とお茶との関わりが一番長いのではないでしょうか。日本は、どちらかと言うと、僧侶とお茶との関わりの歴史が長く、しかも現代にも続いています。

茶の葉から生まれた文化は、いつの間にか、お茶の淹れ方と飲み方によって、だんだんと人間の精神にまでしみ込んでまいりました。お茶に秘められているものは、ますますすわれわれの探求心を誘ってくれます。

この二つのお茶の道程が違うことによって、現に、二十世紀の八〇年代の終わりから、九十年代の初めごろ、中国大陆では、いろんなお茶が使われながら「型」に仕上げつつある楽しみのお茶から生まれる中国の茶芸と、寛永年間（一六二四～一六四三）に、茶の湯の「型」ができてつつあった嗜みのお茶から生まれる日本の茶道が、我々の前で演出されています。

このように、お茶を、我々人類が発見し、認識して、ついに今日の我々の生活に欠かせないものにまでなっています。このような光景を思い浮かべていただけたらと思います。が、新幹線に乗られた場合、必ず車内の女性販売員が「お茶はいかがですか」と手押し車を押して車内販売に努めるということです。そして、海外旅行中の飛行機の中で、「Tea

or Cafe (ティー オア カフェ)」と、機内サービスを受けた経験もあるし、またビジネスの会合の場でも、お客さんに「お茶ですか、それともコーヒーですか」と尋ねる場面もしばしばあるでしょう。

では、次の内容に入りましょう。

唐の時代は坐りながらお茶を飲んでいたのでしょう。宋の時代の茶法は、立ちながらお茶を立てていました。

茶芸とは茶を品評する技芸と味わう芸術です。「茶は、三割は喉の渴きをいやすため、七割は味わうために飲むものである」と言われています。陸羽の功績は、茶を味わう芸術をはじめて唱えたことで、ただ喉の渴きをいやすためのものだった飲み方を、丁寧に淹れてゆっくりと味わう飲み方に変えることによって、一つの芸術に昇華させ、文化的意義を加えたことにあります。

『茶経』は茶の煎じ方から飲み方まで一連の理論を記し、とくに「四之器（茶器）」、「五之煮（茶の煮たて方）」、「六之飲（茶の飲み方）」では必要な道具を列記し、茶芸の手順を定めています。これにより、当時の人々は実践の中で茶の技芸化の過程に対する初歩的な認識を得ました。

唐代になると、茶は文士や僧侶と結びついて、その世界を深め、陸羽の製茶法や飲茶法の出現が茶文化の基礎を築き上げました。宋代に入ると、献上茶制度の確立にしたがつて、茶への要求は苛酷を極めていきます。宋代の宣和年代には、次のような茶の格付けが見られます。「白茶」、「龍團勝雪」、「密雲龍團」、「小龍團」、「石乳」などです。明清代になると、茶芸を広めるために、人とお茶との関わりあいについて、いろいろと論じられました。このように、唐から宋明清の時代にわたって、中国文人たちは茶芸のようなものを経験しながら、お茶を楽しんでいました。

長年の歳月を経て、お茶は我々の生活の必需品であると同時に、文化の一つにまで進化してまいりました。中国の歴史文献の中には、茶に関する書籍が、たくさんあります。それは、茶の文化性を物語っています。茶書の中では、宋の時代には、三〇部あまりの専門茶書があり、多作期としては、恐らく明の時代でしょう。専門的茶書は、五〇部あまりもあります。しかし、二六〇年近くの歴史を持つ清の時代では、残念ながら茶書は一〇部ぐらいしかありません。中国茶書の特徴は、技芸史的に捉えながら書かれている印象が強いのです。

さて、これまでは、中国の飲茶思想や習慣などをお話しました。次に、日本の茶道、茶禅一味について、述べます。

## 茶の湯に潜む精神主義

遣唐僧の空海と最澄一行が八〇四年の七月に中国の長安に到着しました。唐代の飲茶法を最初に日本にもたらしたのは、最澄であると一般的に述べられていますが、一年足らずしか唐にいなかった最澄にとつて、茶法など身に付くはずはありません。中国仏教思想をはじめ、唐代の飲茶法や製法などを、最澄に教えたのは、実は永忠という和尚さんです。かれは、七七七年から唐に渡り、在唐三〇年以上のベテランの遣唐僧です。大僧都永忠は中国に三〇年も住んでいて、お茶とも関わりが深い。彼はお寺で留学生の接待の任に当たっていて、最澄などが渡ったときに世話役をしていた人物です。先にも触れましたが、唐代の七六〇年ごろ、陸羽が『茶経』を著しています。大僧都永忠は陸羽との付き合いがあったかどうかはわかりませんが、たとえ付き合いがなかったとしても、陸羽時代のお茶の姿に、きっと大僧都永忠は何らかの形で接したのではなからうかと考えられます。もし付き合いがあったことが確認されれば、茶文化研究史上の大発見ではないかと思えます。

『日本後紀』の弘仁六年（八一五年）四月二二日の条に「この日、嵯峨天皇は近江の唐崎に行幸された。天皇は、崇福寺をへて、凡釈寺に至って詩宴をもよおしたが、その



あとで、同寺の大僧都永忠が、みずから煎茶して、これを天皇に献じた」とあります。八〇五年に帰朝して、一〇年後に嵯峨天皇に献茶したのは、果たして団茶であったのか、または、後の遣唐僧に分けてもらったのかは、疑問の一つです。とにかくお寺での献茶でした。

中日茶文化交流史において、八九四年の遣唐使の撤廃によって、お茶の往還は、長い間、閉ざされてしまいました。それにしても、平安初期の唐の飲茶風は、平安後期にも依然として残っていて、後にはその飲茶風が九州にまで及んでいました。製茶も行われていたのです。

五、六年前に、私は、わが大学の協定校である佐賀大学の要請で、「中国のお茶の現状について」と題して、佐賀の日中友好協会の皆さんにお話をしたとき、お茶に詳しい方から、こう話しかけられました「こちらの嬉野茶は依然お国の南方の釜炒り茶の姿そのままですよ」と。いつごろの茶法なのか。恐らく明の時代の中国の緑茶の茶法でしょう。（製茶と飲茶法参照）

中国と日本の製茶および飲茶法をわかりやすく理解していただくために、筒井絃一先生が考えられたことをもとに年表を作りました。（図4）

歴史上、平安時代は唐から「団茶法」、鎌倉時代は宋から「抹茶法」、江戸時代は清か

# 中国と日本の製茶および飲茶法

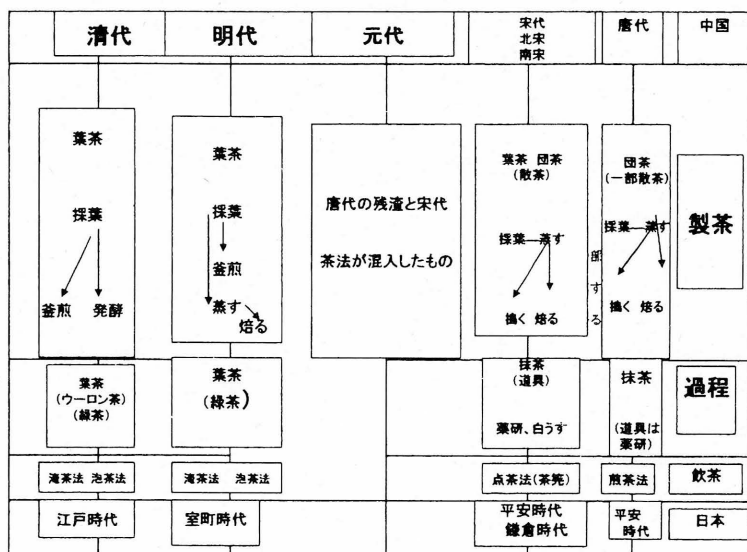


図 4

ら「煎茶法」がそれぞれ移入されたと言われています。

しかし、筒井先生はそうは考えていません。上の表のように、日本の飲茶のプロセスには、平安朝には、「煎茶法」、鎌倉時代には「点茶法」、そして、江戸時代には、「淹茶法<sup>えん</sup>」か「泡茶法」が用いられたと主張されました。しかし、これまでの著書の殆どは、江戸中期に日本に伝わったのは、きわめて自由な方法で喫茶の趣味を楽しむもうとする煎茶法であると述べています。現在も、煎茶という言葉がそのまま使われています。北京大学の滕軍先生は、「中国両宋時代の点茶法（茶研または石臼で茶

を挽いて、茶粉状にしてから、茶筥で撃沸げきふつをする）が和様化し、日本的茶の湯文化が形成されました。それと同じように、煎茶の受け入れも、やはり明の時代の釜煎茶で、また文人精神を背景に、清の時代（十九世紀六〇年代）に、日本的煎茶道が形成されました。それまでは禅宗精神をモチーフに点茶法の世界として展開されていました」と指摘しました。江戸時代に、一体「煎茶法」が伝わったのか、または、「泡茶法」が伝わったのかは、今後の研究の成果を待つしかありません。

この表で、一つのこと分かりました。すなわち、飲茶作法そのものは中日双方で違いますが、飲茶思想はそれぞれの文化の一つとして、進化し、発展し、今日にいたっています。

世界のお茶の現状から考えてみれば、中国も印度もイギリスもお茶の消費大国でしょう。日本は、お茶の消費大国であると同時に、茶文化の大国でもあるでしょう。

日本にはお茶に関して三つの姿があります。一つは茶道、二つは、江戸中期に黄檗宗の開祖・隠元によって招来された煎茶道、もう一つは、缶やペットボトルに入った、いわゆるニュー・ティーであります。このように三種のお茶の姿があります。イギリスとインドも茶の消費大国ですが、彼らは主に紅茶を飲み、またその飲み方もそれぞれ違います。

日本が茶文化の大国であるということは、この図を見てもわかっていただけるでしょう。(図5)

臨済宗の開祖となった栄西は、永治元年(一一四一年)備中(岡山)に生まれ、一四歳で出家しました。比叡山で修行した後、二七歳で宋に渡りました。彼は、一一

六八年と一一八七年の二回入宋し、二回目は一一九一年に帰国しましたが、この時、宋から茶の苗を持ち帰り、背振山(今の佐賀県に所在)で栽培する一方、『喫茶養生記』を著し、この中で茶の薬としての効用を強調しています。その効用について、エピソードによれば、栄西が宿酔による頭痛にかかった將軍源実朝に茶を薬として勧め、すぐ治したということです。その折、栄西がこの『喫茶養生記』を献上しました。本の中で、栄西の説明によれば、人間の五臓は、それぞれその好むところの五味を多く摂取することによって、もっと健康になるということをアピールしました。例えば、肺臓は辛い味を好み、肝臓は酸っぱい味を好み、脾臓は甘い味を好み、腎臓は塩辛い味を好み、最後



図5

の心臓は苦い味を好みます。これによって、喫茶の風習はやがてお寺から武家社会あるいは一般の庶民にまで進出し始めたと見られます。

栄西が宋から伝えた喫茶は、それまでの団茶・餅茶ではなく、当時の宋に広まっていた抹茶（点茶）であり、早朝に摘んだ茶を蒸し、それを火にあぶって乾燥させてから瓶に詰めて保存し、飲用する直前に、これを臼で挽いて粉末にして湯に溶いて、茶筴で攪拌したあとで飲むという、今の抹茶の飲み方でした。この抹茶による茶の飲み方は、その後中国では廃れ、現在では行われていません。その代わり、日本では、これをモチーフに、茶の湯の世界をどんどん創造していきました。

日本が茶文化の大国という根拠は、歴史上の人物が存在するばかりでなく、数多くの茶書からも見られます。

日本の茶書については、江戸時代に出版された茶書は、筒井絃一氏の調査では、二四九あります。しかも同一本の出版が繰り返される場合もあり、無刊記本まで入れると三三〇点を超えています。現在伝えられる茶書の総数は一万点を越すと言われています。それらは、メモ程度の簡単なものから、備忘録としての手前書に至るまでのものが大部分を占めています。これらの膨大な茶書群の中から選ばれて出版されたものは、二パーセントあまりに過ぎないと言われています。

さて、日本の精神世界では、茶道の美意識は大きく日常生活に影響を及ぼしています。

### ①日本茶道の中の美意識について

美意識は、精神世界に属し、具体的な形もないようなものと思われませんが、実は、そうではありません。茶道はその形で美意識を表しています。

日本の茶の湯における先駆者の一人として、村田珠光（一四二三—一五〇二）という人物がいます。彼は、最初に禅宗の礼法を茶の湯に取り入れ、禅を茶の湯の思想にしていきました。そして、彼はまた初めて茶の湯の心を考え出した人ではないでしょうか。村田珠光は八〇歳まで生き、彼の遺文に「心乃文」があり、四百字未満の文章ですが、とても難解なものでした。全体を五つの部分に分けて論じています。一、茶の湯を思想・精神を含む「道」としてとらえ、いわゆる心の我慢、我執を主張 二、和漢渾然一体を主張 三、第二段に対しての付け加え、唐物と和物との関係説を披露 四、藤原定家の「みわたせば はなももみじも なかりけり うらのとまやの あきのゆうぐれ」の歌を引き、花紅葉（最高の唐物）と、苔屋（無一物）を唱え 五、〃心の師となれ〃の主張など、を語っていました。

珠光は簡素な茶に憧れ、わびの境地を作り上げました。完全なものより、不完全、或

いはやつれた物の方が美しい。『月も雲間になきはいやにて候』に代表されています。つまり、不足の美、余白の美こそが本当の美である、と言います。それは具体的にどのような形式をとるかと言えば、書院の正式の床であれば張付床といって、床に紙を張り込み、描いた襖が床壁に張り付けてあります。こうした床が多いのを、珠光はただ白紙の鳥子紙の貼り付けにしたというところに現われています。何も描いていない白紙は、逆に一切を描き尽くした「無」に通じるであろうと珠光は考えました。

このような発想を受け継いだのは、武野紹鷗（一五〇二―一五五五）です。紹鷗は珠光のわび茶の精神を受け継ぎ、歌学、連歌、書と茶の湯を習い、閑寂・清澄な世界、あるいは枯淡の境地をあらわしていくようになります。例えば、紹鷗は民家の荒壁にも通じる土壁を求めながら、そこに秘められる美意識を「わび」という言葉で表現しました。そして、連歌を茶の湯に見立てて、ワイワイガヤガヤの雑然とした雰囲気嫌い、しみじみとした風情を求める清雅の気こそ、茶の湯の会の行き方ではないか。紹鷗は、茶の湯の独特の雰囲気や境地を、実践を通して独自の「わび・さびの世界」を考案していました。このもの静かでどこなく寂しげな境地のような枯淡な趣を美意識として発展させたところに、日本文化的なるものを十分察知することができているのではないのでしょうか。

茶の湯の型と理念を完成させたのは、千利休であったと言われます。（図6）



図 6

千利休は一七歳ごろから茶の湯の修行をはじめ、一九歳の時、武野紹鷗に入門しました。最初の師匠は北向道陳でした。二四歳の時、宗易という称号をもらいました。一五八五年に禁裏茶会にて、正親町天皇より「利休巨士」号を賜り、「天下一宗匠」と称されました。

千利休のわび茶の実践例としては、私は、このように捉えています。一、侘び茶の伝統を受け継いだこと。若年より親しんだ禅の精神を茶の湯に反映させながら精神性を深め、茶道の型を確立して茶聖と称されました。利休は従来の遊興性の強い茶会を排しました。二、茶の心の美の発見。茶の道具などに対し、直接目に見える美しさではなく、その風情のなかに美的な境地や、心の充足を探索しようとする精神をもつて見ることで、利休のわび茶の湯を語るキーワードとも言えます。三、茶会と点前の形式を完成させ、独創的な茶室と道具を創造したこと。イ、茶碗について。当時の茶の湯では、



唐物や高麗物のほかに和物では瀬戸、美濃といった茶碗が主に用いられていましたが、利休と長次郎との出会いが「楽茶碗」という当時としては斬新なスタイルの茶碗を生み出したのです。楽の茶碗の特質は、轆轤を用いず、すべて手作りで、高台まで全体に釉薬がかかり、茶人の要求に応えて、ごく少数焼かれた茶碗です。ほとんど模様らしい意匠をもたず、色も赤と黒の二色に分かれ、無一物の境涯を追究するがごとく静かな形態と釉調に特色があります。いわば利休は、楽茶碗を通して己の侘び茶の美と心を表現しようとしたのです、楽の茶碗は、茶道具を目的として創造された最初の茶碗であったと言えましょう。口、懷石料理について。一汁三菜という簡素な懷石料理も利休のわびの理念から生み出されたものと言えます。利休にとって、茶の湯の料理の目的は美味であるとか、珍味であることではなく、侘び茶人らしいわびの表現であることでした。それが、わび茶の料理であるかぎり、亭主によるわび茶の趣向の表現の一部に料理も位置づけられていました。料理が亭主から客へのメッセージを含むことはしばしばありますが、茶の湯料理の場合、わびの表現という新しいメッセージが料理に託されました。わびの表現はそのなかに季節感の問題や、食器のデザイン、食札などを含み、それらを総合した料理を生み出す力となりました。ここに懷石とよばれる茶の湯料理の新しい主張が生じました。「南方録」には、「わび茶の小座敷の料理は汁一つに菜が二種か三種、酒も

軽くすること、わび座敷にいかにも結構な料理ぶったことはふさわしくない」と書いてあります。ハ、茶室について。聚楽屋敷のように、利休は「四畳半」から「二畳」、さらには「一畳半」に至るまで狭小化していく傾向を実践していきます。例えば、現存する待庵に見られる二畳の茶室は、わび茶を表現するための、亭主と客の最小の空間となります。また重要な要素として、客が潜り入るにじり口の工夫もしました。こうしたすべての要素により、茶室の中は緊張感に満ちた聖なる空間となつたのです。待庵は二畳敷という最小の茶室です。二畳といえば、亭主が茶をたてるための座一畳を除いて、客に許された空間はわずか一畳にすぎません。ここまで徹底すると、茶の湯は強い緊張感を持つようになり、その内部での作法は、かえつて非日常的なふるまいを要求することとなりました。

以上の分析から、「不完全な美を愛する」「素朴な美を好む」「わびから生まれる自然観」という日本人の美意識を窺い知ることができます。そして、このような美意識が日本人の思想、行動、日常生活などにも影響していきます。

茶道の礼儀もいろいろあるでしょう。例えば、寺院茶を見てみましょう。南浦という僧が宋の時代に中国の浙江省の径山寺で学んだ寺院茶礼は、その一つです。また、大名茶や町衆茶の茶礼なども皆様のご存じの通りでしょう。

## ② 日本茶道の中の礼儀

ここでは、武將茶を取り上げて、お話いたします。

日本の武家社会は、大体三つの段階を経たのではないかと思います。一一八五年から一三三六年までの鎌倉幕府、一三三六年から一五七三年までの室町幕府（この後に、日本歴史の時代区分の上では、つまり十五世紀後半から十六世紀の末、織田信長・豊臣秀吉により天下統一が実現するまでの約一世紀の戦国時代がある）と一六〇三年から一八五七年までの徳川幕府です。

封建時代の武家社会のシンボルとなるのは、剣を所持するかどうかで身分が分かれていました。「士農工商」の中の武士階級は、他の三者を圧倒する特権を持っていました。こういった武士たちを、一体どのように、思想教育をしたらよいか、幕府当局または將軍が、考えていました。儒教思想の中の「忠」の精神とか、禪の中の「無」の思想とか、茶の湯の中の「礼」の精神など、つまり日本前近代の精神論が、いろんな場面で展開されていたのではないのでしょうか。

さて、人間の精神とは何なのか？ 広辞苑にいわく、精神とは、「心、またはたましい。多くの観念論的形而上学では、世界の根本原理とされているもの」とあります。精神の「神」は神という字のように、普遍的に捉えたら、つまり人間の体にか神が宿ると、

精神というものが成り立ってくるのでしょうか。では、茶の湯の中の精神性とは、一体何なのか。茶書「茶話指月集」（一六三六）には、かなりの行数で茶の湯の精神を論じていたことがわかりました。

茶の湯は武士の礼式の構築に大きな役割を果たしました。特に織田信長の「茶湯御政道」によって、武士から大名または將軍まで茶の礼式を、必須の条件として見なし、やがて、戦国時代の武將たちの精神に沁みこんだのではないのでしょうか。

『松平頼重伝——高松藩祖』（一九六四年）という書物の中で、学術技芸趣味などの章節の「茶道と能」の項目に、松平頼重が若くして茶道に練達、お能も拝見などが記載されています。今で言えば、いわゆる知事の座についても、こうした茶道の礼とか、あるいは能などの教養も大事にすべきであるということなのでしょう。

こうした前近代の人々の教養ぶりが、近代化後の岡倉天心、高橋草庵、益田孝という人々にも大きな影響を及ぼしたのでしょうか。

### ③ 日本茶道の中の権力観

將軍は、長期にわたって、権力の中核にいるか、あるいは権力そのものです。しかし、お茶を無視することはできませんでした。江戸時代の職種の茶坊主の組織構造を見てみ

ましよう。そもそも「茶坊主」とは何でしょうか。江戸城内において、「僧形剃髪、法服」でいろいろな雑役に従事する者たちを総称して「坊主」と呼んでいました。江戸時代の城内を整理、管理する必要性から生まれた一種独特の職種です。

江戸城は 表（幕府役所）と奥（大奥）の大区画に分かれています。「表」は男だけの世界であり、「奥」すなわち「大奥」は女だけの世界で、その中に入っている男は將軍と、緊急の場合の医師と僧侶だけです。この「表」の雑用を受け持っているのが、茶坊主衆でした。炊事（賄い方）、掃除や湯茶の接待、案内と取次ぎなど、当時広い江戸城でしたから、坊主衆の担当区域も分けられていて、その呼称も異なっているのです。

数寄屋茶坊主（すきやちゃぼうず）

御三家と溜之間詰めの大名の接待（大名家の序列により控の席が決まっております）、重要人物の接待の仕事）

紅葉山茶坊主（もみじやまちゃぼうず）

城内紅葉山にある將軍御靈廟の管理

奥茶坊主（おくちゃぼうず）

將軍の住居（御用部屋、執務部屋）の管理

表茶坊主（おもてちゃぼうず）

表座敷を管理し、諸大名、旗本の接待を

担当

彼らは大名たちに給仕するため、茶湯を持つて廊下や座敷をうろうろしているところから、俗に「茶坊主」と呼ばれています。これは室町時代からの「お茶頭」の風習を受け継いだものです。

数寄屋坊主は、江戸時代の当初は茶の湯の達者な者が任命されていましたが、次第に將軍の茶道具の保管や、將軍が賓客を茶の湯でもてなす際の介添えなどの働きが、主な任務です。毎年新茶が採れる時期になると、数寄屋頭は、將軍御用の宇治茶を納める茶壺を京都から運んできます。時代劇の中で、とかく悪名高い「お茶壺道中」という言葉のように、かれらは、いつも將軍の権力を傘に着ていたのです。実は利休時代の茶に秘められていたのもやはり強い権力でした。

ここまで、日本の茶道の美意識や礼や権力観などに触れてまいりましたが、お茶は文化としても、それなりの役割を果たしてまいりました。これからも今まで以上の役割を果たすことでしょう。つまり平和の役割を果たすに違いはないと考えています。そういう意味においては、裏千家の第十五代家元千玄室氏の功績が大きいです。氏が提唱されました「一碗の茶」の平和理念はもう全世界に普及しつつあります。それは、以下のようなデータでわかります。

お茶を媒介にして、一期一会という理念のもとに、人と人との触れ合いによる平和のネットワークを構築している今日、茶道の主張している平和思想は、洋の東西を問わず、より多くの人々に受け入れられています。

裏千家淡交会の海外ネットワークとしては、北米、中南米、アジア、オセアニア、アフリカそしてヨーロッパへと広がり、世界三〇数ヶ国一〇〇ヶ所ほどの裏千家の拠点があります。裏千家宗家から派遣された茶道講師が常駐する海外出張所は、ニューヨークをはじめ、ワシントン、サンフランシスコ、シアトル、ホノルル、バンクーバー、ロンドン、パリ、ローマ、デュッセルドルフ、サンパウロ、メキシコ・シティー、シドニー、ソウル、北京、天津、大連など世界の要所におかれています。また、裏千家寄贈の茶室も、ハワイ、バンクーバー、パリ、ロンドン、ミュンヘン、ブリュッセル、ヘルシンキ、リマ、サンパウロ、北京、天津など多くの主要都市にあり、茶道普及のみならず日本文化の紹介と友好のシンボルとして大きく貢献しています。それに対し、同じお茶の大国としての中国の茶文化は、今後どのように日本の茶の湯文化と同じように世界に発信していくのが大きな課題だと思います。楽しみの茶と嗜みの茶の両方から発信できたら、もっともっと大きな力になるに違いないでしょう。この二つの茶、いいえ、さらに、印度、イギリスや他の国々の茶も一緒に加わって、世界にもっともっと輪を広げようでは

ありませんか。

茶道の平和思想が世界の人々に受け入れられていることは、日本国内における茶道の伝承とその活動によって支えられています。茶道裏千家淡交会のほかに、表千家、武者小路千家、藪内流などの茶道の活動もあります。茶道の中国における活動は、日中両国関係の進展とともに、活発になりつつあります。両国の文化交流にも寄与しています。例えば、裏千家は、一〇〇回以上にわたって、中国と交流を行い、茶道の「道」ということを具体的に表し、相互理解を深めました。

## 二つの茶の世界

中国では、「道」ではなく、「芸」という形で、中国の茶文化を豊かにしつつあります。茶芸の「芸」とは、技芸ないしは芸術という意味で、中国の茶芸は、「いかに美しいお茶を入れるか、または美味しいお茶を飲むかという『身心』への効用と快楽を求めるもの」です。それに対して、日本の茶道は、「わび・さび」という含意で、即ち茶道は唯美的かつ「心身」的な修練を重ね、世俗的時空を超越するもの」です。

日本では、茶道以外にも歌道、蹴鞠道、香道、華道、剣道、柔道、弓道、書道、将棋



道、空手道、神道、武士道の世界もありますが、「道」は大きく有形と無形に分けられると思います。有形なものとしては、体を媒介にするものです。しかし、神道や武士道となると、無形のものでしょうか。この二つの「道」の世界があります。中国では「道」が付くものは一つありません。付けられているのは「法」「芸」「術」であって、たとえば書道の場合は「書法」であり、華道は「花芸」、剣道は「剣術」です。中国の茶文化は数千年を経たにもかかわらず、茶道というような表現にはなりませんでした。今日では、茶芸というものは、私たちの生活を賑わしています。例えば、中国各地の町を歩きまわると、茶芸館があちこちに見受けられます。

たかがお茶なのに、どうして「道」が日本では必要になったのか。片や、中国はなぜ茶道の「道」を積極的に主張しなかったのか。私は四つの原因があると考えています。(1) 陸羽は最高の哲学理念をもった「茶道」という言葉を積極的に提唱しませんでした。(2) 後継者不足で、茶法の道を提唱する者がいませんでした。(3) 孔子の「早聞此道、夕可死矣(朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり)」に現れる倫理道德が論語に帰結し、「道」という字の使用を敬遠したのではないのでしょうか。(4) 宋代に献上茶工芸が発展するにしたがい、茶芸の典型的な闘茶(茗戦)が起こり、宮廷の茶、功利の茶、風俗の茶、遊芸の茶が生まれ、それによって、茶道の精神を主軸とする人倫の茶が生まれませ

んでした。

では、茶芸の事例を見てください。これは、茶芸師の実演の写真です。(図7)

茶芸に欠かせない要素の一つは、茶席です。では茶席とは、何でしょうか。「茶席とは、茶道具を媒介にして、ある基準に基づいて芸術の型を演出するものである」と考えたいのです。茶席の要素には次のようなものがあります。

茶席の構造：舞台の空間的調和（装置などの

大小・明暗・高低・遠近・左右

茶席の構成：①茶品、②道具の組み合わせ、

③敷物、④生花、⑤絵掛け、⑥

茶菓子、⑦舞台の効果と雰囲気（音楽などを含む）

茶席の種類：①少年茶席、②都会茶席、③地方茶席、④模倣茶席（古代のもの）

茶席の内容：①緑茶、②ウーロン茶、③ジャスミン茶、④プーアル茶



図7

茶席の形態：一人演出 数人演出 坐式演出 立式演出 膝付き演出

茶席の方法：コップ式（緑茶） 陶磁製茶碗式 紫砂壺セット式（花茶か緑茶）

### 「茶芸」の「茶道」に学ぶべきもの

茶芸が茶道に学ぶべきものは、もちろん、作法（型）です。茶芸には茶道のような精神世界を作りだす土台がないと思います。それと同じように、日本の茶道には中国の茶芸のような表現が現れないでしょう。茶道のような精神世界は中国人が受け入れるには精神的に難しい面もあるからです。しかし、「日本の茶の湯の姿、または形から生まれた心へ」あるいは「日本茶の湯の心から姿へ、または形へ」という、この形への執着心といった精神を学び、少しでも中国の茶芸における人間形成の役割を果たしてゆきたいものです。そういう意味において、「茶芸」の茶文化史における位置づけと今後のあるべき姿を、日本の茶の湯の世界のように、政策誘導面、人材育成面、広告宣伝面と文化研究面でも、大いに力を入れるべきではないかと考えられます。（図8）

お茶というものは、実に奥深いものです。しかし、一方では、たんに我々の生活に密

着したお茶のイメージもあるでしょう。私たちの「茶」の字は、「草・人・木」を組合わせて、作り上げられています。これらの言葉は、お茶に秘められている中国人と日本人の知恵を端的に表現しています。

私はここで、まず茶芸とは一体何かを定義してみます。茶芸とは、すなわちお茶の入れ方（茶選び、水貯え、道具整えなど）と、美味しいお茶の飲み方（色、香、味、形という諸要素の美）、並びに立派な茶芸人の育成（教養のある人間形成）という三要素を備えた生活的かつ健康的な総合芸術です。

ご承知のように、中国にはいろいろな文化的要素がありますが、ただそれを仕上げていく人がそう多くはいないような気がします。この点においては、日本の研究者の方々に学ぶべきところがあると思います。つまり日本の学者はこれまで西洋的学術研究方法で、「一から二が生まれる」という細分化する方法で、自国の文化の細部にまで分析を



図 8

加え、たえず新しい研究成果が積み上げられてきているという点です。それに対し、中国の場合の学術研究法は、正に「二から一が生まれる」かのような、たいへんスケールの大きな観点で物事を論じていきます。

お茶はシルクロードと同じように長い道程を歩んできました。それで「ティー・ロード」とまで呼ばれるようになっていきます。この「文明植物」があるからこそ、我々の飲生活は、一層豊かになりました。そしてまた、我々一人ひとりの人間が、正にこのお茶の色、香りと味を毎日楽しみながら、それに秘められる「和<sup>わ</sup>美<sup>び</sup>」の精神と対話しているのではないかと感じてなりません。

お茶って本当にいいですね。茶寿の一〇八歳を目安に、もつともつと長生きできるように毎日おいしいお茶を入れて、楽しいお茶を忘れずに飲みましょね、ありがとうございました。

## 発表を終えて

「ああ、ほっとした」と、重荷が肩から降りた快感を覚えました。これは第 200 回目を迎えた「日文研フォーラム」における発表が終わった瞬間に、緊張が解けた実感です。

中国にいた時、とりわけ教鞭を取って授業する際、学生たちに緊張を与えるばかりでした。今回は違います。大勢の京都市民の前に、茶文化に関する宿題を発表したことで、反対の立場に立たされました。余計にその緊張の度合いを痛感しました。でも、最初からその緊張に真正面から対処する心構えができています。

この半年、憧れ、いや、今はすっかり好きになった日文研のおかげで、自ら緊張と刺激などを求めながら、茶文化の研究を中心に、「良い緊張感」のある日々を過ごしています。本当にありがとうございました。

発表に対する質疑応答に入りますと、会場から「日本では、茶は権力と結びついて発展してきたが、その功罪とは?」、「日本では、なぜ、芸事が精神性を帯びるのか?」、「裏千家のお茶の稽古には、もっともっと手軽に行ける所になってほしい」といった質問や要望や感想を多くいただきました。その応答にもさらなる緊張を感じました。さすがに千年の古都を生活の本拠地とする京都市民の茶文化に対する理解と造詣の深さに敬服しました。

人間同士がお互いに緊張感を与えたり、与えられたりすることは、ギブ&テイクつまり持ちつ持たれつという相互依存・相互作用が働いているのではないのでしょうか。そのような相互関係の成り立つ前提条件は「調和」そのものであると思います。

茶文化を考察して、茶の湯の世界はやや「緊張」気味な礼儀作法を通じて、調和精神を醸し出し、「和」の真髄を具現しているのではないかとつくづく感じています。即ち、楽しみのお茶を常に人生の豊かさに結びつけながら飲んでいくものと、嗜みのお茶で精神を修養し、礼儀作法を究めていくものとのがあると考えます。この二つを兼ね備えていればこそ、茶文化の真意を悟り、より美味しく嗜むことができるのです。

この度、「日文研フォーラム 第 200 回」での発表は、多くの方々のご指導とご協力によって予定通り実現しました。準備段階からカウンターパートの鈴木貞美教授に大変お世話になり、いろいろご指導を賜りました。また、諸先生方からご教示とご助言をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

そして、挨拶にわざわざ駆けつけられた国際日本文化研究センター教授（副所長）の井上章一先生をはじめ、司会者のテモテ・カーン准教授ならびに、広報などでご協力いただいた研究協力課と編集など関係部署の皆様にも心から感謝の意を表します。

今回味わった「緊張」で、日文研から得られた「お土産」がまた一つ増えました。

多謝！多謝！

陸留子

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授)</p> <p>Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授)</p> <p>Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授)</p> <p>パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授)</p> <p>「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-gyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授)</p> <p>「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授)</p> <p>「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員)</p> <p>「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>Hiroshi SIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授)</p> <p>「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—一宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」



119	11. 6. 8 (1999)	マ リ ア・ヴ ォ イ ヴ ォ デ ィ ッ チ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
120	11. 7. 13	R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
123	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
125	12. 1. 11 (2000)	エミリア・ガ デ レ ヴ ァ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3. 14	アンナ・マリア・ト レ ー ン ハ ル ト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4. 11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑬②	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬③	12. 6.13	ケネス・L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬④	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬⑤	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
⑬⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10	Li Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭④①	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭④②	13. 9.18	Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭④③	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭④④	14. 2.12	Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

⑬⑤	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑬⑥	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
⑬⑦	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	Markus RÜTTERMAN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑬⑧	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 暁梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

①60	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 鉦烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツ イ ゴ バ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
①65	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
①66	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9	エフゲニー S. バクシエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
①69	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

①70	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
①71	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リ ビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノ ース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役の役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
①77	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介『菌車』、ストリンダベリ、そして狂気」
①78	17. 3. 8	WU Yongmei 呉 咏梅 (北京日本学研究中心専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐる—」
①79	17. 4.12	ノエル ジョン ピニングトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念—能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池 明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	IAN ジェームズ マ ク マ レ ン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブローックカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑫	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭 在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベ ル ク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sang Hwan 魯 成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラブチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・グリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字—古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈—なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュウ ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く—肉体表現と流光斎—」
188	18. 2.21	ウィリアム バック ブレッカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ—江戸時代の郊外における美学的スペース—」
189	18. 3.14	サレー アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話—日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐる—」

①90	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金 容儀 (全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員) 「玄界灘を渡った鬼のイメージ—なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか—」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔 博光 (成均館大学校教授・日文研外国人研究員) 「京都と文化表象—18世紀朝鮮通信使の目から—」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉 春英 (東北師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
①93	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周 維宏 (北京日本学研究中心教授・日文研外国人研究員) 「近代化による農村の変貌とその捉え方について—中日農村を比較して—」
①94	18. 9.19	ダリア シュバンバリーテ Dalia SVAMBARYTE (リトアニア ビリニュス大学講師・日文研外国人研究員) 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐる」
①95	18.10.10	エドウィーナ パーマー Edwina PALMER (カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員) 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」—高等教育の社会科カリキュラムを中心に—」
196	18.11.14	ヨセフ キブルツ Josef A. KYBURZ (フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員) 「おれが語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート エスキルドセン Robert ESKILDSEN (日文研外国人研究員) 「異国船物語—江戸後期に描かれた船—」
①98	19. 1.16 (2007)	プラット アブラハム ジョージ Pullattu Abraham GEORGE (ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員) 「日印関係とインドにおける日本研究—宮沢賢治の素食主義の思想—」
199	19. 2.13	スティリアノス パパアレクサンドロプロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS (アテネ大学神学部 準教授 国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「日本仏教論—その思想史的展開をめぐる—」



200	19. 3.13 (2007)	LU Liu Di 陸 留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
201	19. 4.18	モ ハ メ ッ ド レ ザ サ ル カ ー ル ア ラ ニ Mohammad Reza SARKAR ARANI (アラメ タバタバイ大学教育学部(イラン)助教授・国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「国境を越えた日本の学校文化」
202	19. 5.16	ZHANG Zhe Jun 張 哲俊 (北京師範大学文学院比較文学研究所 教授・国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「唐代文学における日本のイメージ」
203	19. 6.13	チャワーリン サウエッタナン Chavalin SVETANANT (チュラーロンコーン大学 専任講師・国際日本文化研究センター 外国人研究員) 「『気』の思想・『こころ』の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。



\*\*\*\*\*

発行日 2007年6月1日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048  
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

\*\*\*\*\*

©2007 国際日本文化研究センター





■ 日時

2007年 3 月13日（火）

午後 2 時～ 4 時30分

■ 会場

キャンパスプラザ京都

第10回の振り返りとして、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化

を祝う日として、中国で5月1日の暇文化